



下松市の工業地帯は海峡越しに笠戸島を臨む旧塩田地帯に構築されている

産官民の連携で創る住みよさ定評の《星ふるまち》 目標は全世代が元気にぎわいと活力に満ちたまち

ものづくりのまちの伝統が構築
住みよさの評価は全国区

山口県の南東部にあり、市域南部が瀬戸内海に面する「ものづくりのまち・下松市」は、昭和14（1939）年11月3日、旧都濃郡下松町・同久保村・同末武南村・同花岡村の1町

3村の合併で市制施行。下松市としての歩みを開始した。また、昭和29（1954）年11月1日には旧都濃郡米川村を編入し、昭和37（1962）年には旧都濃郡都濃町の一部を編入、現在の市域89・34km²（市制施行時は62・90km²）となったが、下松市は平成の大合併の潮流の際には単独市制を貫いた、県内では数少ない都市の一つだ。

市制施行時の人口は3万3122人で、本年2月1日現在の人口は5万6223人。人口のピークは令和2（2020）年2月末の5万7369人だった。山口県の人口動態が昭和33（1958）年の約162万人をピークに通減傾向を続けているのに対し、下松市は令和2年まで増加を続け、同年実施の国勢調査では下松市は県内で唯一、前回調査より人口を増やした自治体となった。その後、同年を境に下松市も微減傾向の流れに入りつつあるものの、下松市の人口の現状は「ほぼ横ばい」に近い水準を保っていると

くにい ますお
国井益雄
下松市長



いえる。その背景にはさまざま要因が考えられるが、大きいのは「ものづくりのまち」ならではの「豊富な雇用の場」だ。

下松市内の工業地帯は、周知の通り、近代以降に多種多様なものづくり産業が立地した瀬戸内工業地帯の一角を占める、周南工業地域のさらに中核を成しており、大正時代からにぎわいを見せてきた。

ものづくり産業の集積化に付随して、就業者とその家族の移住・定住などが相次ぎ、



徳山下松港は国選定の「国際バルク戦略港湾」。国際物流ターミナル整備事業の一環で大型船舶の入港が可能な水深19mの棧橋が新たに造られた

下松市長は淡々とそう語る。だが「住みよさランキング」における下松市は、実は全国上位の常連だ。2025年版以前の5年間も全国第10位から33位までと上位を保ち、生活の「快適度」と「利便度」への評価が特に高い。これは同ランキング(平成5/1993年開始)の初期から一貫した傾向で、下松市の「住みよさ」に対する全国区的评价は、もはや「定評」と化しているともいえる。

「その要因を私なりに考えますと、例えば市民の暮らしに密着した水道料金に関して、下松市は温



生活環境面の都市化も総合的に進み、都市的集積と自然環境のバランスが取れたまちとして、今日に至るまで推移してきた。その成果は、工業都市としての実力の一つの表象ともいえる、下松市の「暮らしやすさ」への高い評価に示されている。

例えば直近の「住みよさランキング2025(東洋経済新報社)」において、下松市は山口県内第1位、中四国地方で第2位、全国(812市区/同ランキングによると東京都千代田区、中央区、港区の3区は対象から除外)でも第8位という輝かしい位置付けがなされているのだ。

「近年ずっと続いている、下松市の暮らし

やすさ、住みよさへの高い評価はもちろんうれしい限りです。しかし、全国の多くの自治体と同様、人口減少の抑制は現在の下松市の長期的課題の一つで、そのための施策・事業もさまざまな形で実施しているところ。それだけに一層、今回の『住みよさランキング』全国第8位という評価には、下松市の現状のまちづくりの方向性は間違っていないのだという確信と新たな勇気を、改めて頂いた気がします」

昭和48(1973)年の入職以来、平成19(2007)年春まで下松市の職員として勤務。3期にわたる山口県議時代を経て、平成28(2016)年4月に就任以来、本年4

見ダムと末武川ダムの二つのダムの効果もあり、山口県では最安価格(全国でも第4位)をずっと維持しています。

また、鉄道・鉄鋼・造船業などの重工業やハイテク産業を軸とする『ものづくりのまち』である下松市は、産業活動が伝統的に活発なため、雇用の場の豊富さに加え、年平均3500億円超の製造品出荷額および、市民税や固定資産税の安定した収入などで、財政力指数も山口県内第1位で推移。市民サービスの向上や新たな公共事業への投資など、市民生活の豊かな質に直結する施策や事業を、積極的に行えるという強みがあ



昭和45年完成の笠戸大橋は美しいアーチが特徴的なランガートラス橋。橋の下を船舶が行き来する様子は下松市を代表する「映え風景」の一つだ



ヒラメの養殖の様も見られる「下松市栽培漁業センター（笠戸島）」は海のテーマパーク的存在の人気施設

ります」（国井市長）

加えて下松市では「妊娠から子育てまで一貫した伴走型の支援体制」に加え、子ども医療費の助成や保育料無償化、小学校給食費無償化、保育園待機児童解消への積極的な対処、放課後児童クラブの拡充など、各種の手厚い子育て支援策を実施している。

地域で就労する人が多い「ものづくりのまち」ならではの「職住接近」が実現し、家族と過ごす時間を確保しやすいという地域特性もある。笠戸島や米泉湖などが織りなす豊かな自然環境があり、休日も近場で楽しく過ごせる良好な環境も整っている。

こうした「住みよさ」が、働き盛り世代および子育て世代の支持を得ていることは、合計特殊出生率が山口県内で第1位、全国（町村も含む）で第37位（令和6（2024）年4月「厚生労働省人口動態保健所・市区町村別統計の概況」より／令和4（2022）年末時点で下松市は1・87、全国平均は1・33、山口県は1・50）であることなどからも

分かる。

「同時に下松市の中心市街地では、自転車で気軽に回れる範囲内に、大型商業施設や医療機関、子育て支援施設、福祉施設などが多く立地しているのも特徴的と自負しています。最大の雇用の場である工業地帯も、中心市街地には隣接する形で展開しています。

市民の日常生活に必要なものが職住接近の環境内で全てそろう、文字通りのコンパクトシティなのです」（国井市長）

ものづくりのまちの歩みが醸成 今日に至る産官民の絆

そんなコンパクトシティとしての下松市を象徴する存在感を放つ施設が、中心市街地に立地する《下松タウンセンター・キラル》だ。

市民の日常生活に必要なあらゆる専門店が入居するショッピングモール（ゆめタウン下松）、映画館、座席数1000席を誇る大ホールのある文化会館「スターピアくだまつ」、下松市保健センター、こども家庭センター「ハピスタくだまつ」、下松市休日診療所、下松医師会、ミニFM局などが併設されている。暮らしに必要なモノとコトが凝縮した、商業・文化・健康・医療の複合拠点施設で、まさに「住みよさ」を体現する施設といえる。



商業・文化・健康・医療など市民生活に必要な要素が凝縮された「下松タウンセンター・キラル」はコンパクトシティ・下松市の象徴的施設

長年にわたり構築されてきた、下松市の総合的な「住みよさ」の背景には、大正時代に始まり、今日の「ものづくりのまち・下松市」にまで至る遠大な建設計画と、それに伴う「まちづくりのコンセプト」が存在したことは、下松市の市制施行80周年（令和元／2019年）記念事業で復刻された冊子『秋の夜話』からもうかがえる。

「下松市の市制施行80周年記念式典は、私が市長に就任して4年目の秋、令和元年11月2日に開催しました。復刻版の『秋の夜話』の発行も同日のことでした。

この冊子は、下松市が今まさに誕生しようとする昭和14年11月の直前の時期（10月）に、それまで地域の近代化に大きく尽力し

下松市

(山口県)

市 政 ル ポ

てこられた矢島専平翁（山口県選出の元衆議院議員）が、新市・下松市の出発への『はなむけ』として、大正時代から計画が始まった『工業都市・下松』建設の歴史を振り返りながら、未来の下松市に託す思いがこぼれられた貴重な手記です。市制施行80周年の直前に、この手記の原本が市立図書館に所蔵されていることを知り、一読してすぐ、復刻版の出版を決めました（国井市長）

明治時代から工業地帯の建設が始まった瀬戸内沿岸地域において、まだ漁村だった下松の地に、新たな一大工業都市を建設しようという企図する『下松大工業都市建設計画』が発表されたのは、大正6（1917）年のことだ。立案者は著名な実業家・久原房之助（明治2／1869年～昭和40／1965年）で、矢島専平（明治9／1876年～昭和30／1955年）はその実行推進役となった。

矢島専平は渋沢栄一と共に日本初の電力会社「東京電燈会社」を設立した実業家・矢島作郎の後継者（養子／生まれは下松市に隣接する現・光市）で、若年時は日露戦争などにも従軍した陸軍の軍人だった。退役後に長周銀行の頭取や下松銀行の役員を歴任するなど実業界に転じ、大正6年には、下松の塩田地帯に立地する養父・矢島作郎の別邸（覧海軒／18世紀初頭に地元の豪商が塩田からの利益を注ぎ込み建設した豪邸）を継承した。

現・萩市出身の久原房之助は、日立製作所や日立造船、日産自動車、日本鋳業（現・

ジャパンエナジー）などの母体となった久原鋳業所（後の日立鋳山）を創設した。

「今日も工場群が並ぶ、海峡を隔てて笠戸島を臨むエリア」は、覧海軒が建っていた宮ノ洲地区も含め、江戸時代から続く広大な塩田地帯でした。久原房之助の計画は、この宮ノ洲地区を中心とする広大な塩田地帯に造船・鉄鋼などの大規模工場を誘致し、併せて、現在の下松市の市域と、隣接する周南市の一部を含む旧1町5村（当初は1町3村）のエリアに、新市街地を建設。そこには当時では珍しい上下水道、電車路線、劇場なども整備したモダンな市街地を建設するという、遠大な計画でした。

この話はたちまち地元の人々にも受け入れられます。中心人物の矢島専平翁も自身の所有する塩田や覧海軒を手放すなど、地域の発展と公益のために率先して動きまわりました。ところが当時は、第1次世界大戦（大正3／1914年～大正7／1918年）の真っただ中で、アメリカが日本向けも含めた鉄鋼の輸出を制限したため、造船業が中止になるなど、計画の大幅な変更・縮小を余儀なくさ

れます。

こうして『下松大工業都市建設計画』は、予定通りにはいかなかったわけですが、矢島専平翁を中心に、そうした苦境の中でも『ものづくり』を軸にしたまちづくりを完遂したいという地域の人々の情熱は消えることなく、機械工業や機関車製造などを足掛かりに積極的な工場誘致を実施。それが軌道に乗り、昭和14年に山口県内で7番目の市制を施行し、下松市が誕生する原動力となります。

それから87年目の現在、下松市には約60社の製造業が立地。この工業地帯を基盤に、『住みよさ』でも各方面から評価を頂ける『ものづくりのまち・下松市』が構築されるに至ったのです（国井市長）



年齢や障害の有無に関係なく、多様な特性を持つ利用者が安全・安心に楽しめる数々の配慮がなされたインクルーシブ公園「恋ヶ浜クナイパーク」

自然と都市的集積の好バランス 星ふるまち・下松市の魅力

大正時代に企図された計画とは少し違うかもしれない。だが、下松市の現在の姿は、工業地帯と都市的集積度の高い市街地が混然一体に溶け合う「一大工業都市」の建設を目指す——とした、当初計画の基本理念にも、結果的にかなっているのではないだろうか。

一方、市制施行後の「ものづくりのまち」としての下松市の歩みは、実は常に順調だった訳ではない。下

松市は相次ぐオイルショックで日本経済が混乱に陥った1970年代半ば、法人市民税収入の大幅な下落などから財政再建団体に指定（昭和51/1976年9月）されている。再建計画の実施期間は昭和59（1984）年度までの8年間。計画成立時点の確定赤字額は約23億円だった。

再建期間中は、議会や市民からの協力を取り付けつつ果敢な行財政改革を行い、地域に立地する製造業各社との関係構築も、改め

て緊密なものへと見直されていった。

そうした中、昭和55（1980）年に稼働開始した中国電力の火力発電所増設などに伴う固定資産税・法人市民税などの収入増もあり、再建期間は1年間短縮。昭和58（1983）年度末で赤字を解消し、財政再建団体から脱した。

下松市はその後も財政再建団体時代の教訓を生かし、行財政改革の絶えざる実施に努め、地域に立地する企業との緊密な連携の下、産官民の協働による「住みよさ」「働きやすさ」を基盤とするまちづくりにまい進する。

そうした苦い歴史からの脱却の過程で改めて得られた「産官民の強い絆」こそは、現在の下松市の住みよさの源泉を下支えする、最大の地域財産の一つといえるのかもしれない。

例えば、平成21（2009）年度からは、下松市の鉄鋼産業を代表する企業・東洋鋼板株式会社との連携事業「子どもの豊かな心と夢を育む活動」が始まった。これは同社が下松市での操業75周年記念に開始したプロ



日立製作所で製造された新幹線など鉄道車両の陸上輸送の様を見られる「鉄道車両見学プロジェクト」には毎回多くの見物客が詰めかける



新笠戸ドックで開催される「造船所見学会」。老若男女の市民がこの日を楽しみに待つ

ジェクトで、同社は毎年「次世代育成支援基金」として300万円を下松市に寄付。それを原資に下松市ではスポーツイベントやコンサートなど、小中学生以下の子どもたちを対象とする文化事業のほか、多彩な地域活性化事業を展開している。

さらに、新幹線などの鉄道車両を製造する株式会社日立製作所や、造船の株式会社新笠戸ドックなど、下松市内に立地する主だった事業者は折に触れ「工場見学会」や「産業見学ツアー」などを下松市との連携で開催し、次世代だけでなく全ての年代の市民に向けて、地域産業への理解を深めるイベントを開催している。

中でも市民だけでなく、全国の鉄道ファン、観光客からも大人気なのが「道路を走る鉄道車両見学プロジェクト」だ。鉄道車



東洋鋼板と下松市の連携で展開される「子どもの豊かな心と夢を育む活動」は、地元企業と下松市を結ぶ強い絆の象徴だ

下松市

(山口県)

市 政 ル ポ



花岡福徳稲荷社で毎年11月3日に開催の「稲穂祭」。メインイベントは「きつねの嫁入り」で、良縁が得られる祭りとして近年、若い女性に大人気だ

両の移送は通常、道路がすく深夜に行われるが、下松市ではあえて告知と共に昼間に、大勢のギャラリーを集めて、鉄道車両の移送を見学してもらうイベントを開催したのだ。

「このプロジェクトの主目的は、将来を担う子どもたちや若者たちに、ものづくりへの夢と希望を抱いていただきたいところにあります。日ごろ地域のものづくり産業を支えていただいている市民の皆さんに、鉄道車両の最終出荷の模様と一緒に見ていただきたいという、感謝の念を込めたイベントでもありました」(国井市長)

下松市には「くだまつものづくり女子就業推進認定事業者」制度があり、女性の採用・育成に熱心な企業のブランディングを図っている。また「下松市ものづくり女子応援サイト」モノジョノミカタ」を設置し、ものづくりに関心のある全国の女性に対し、下

松市への誘いを実施している。これは市内に立地するものづくり産業への新たな就業者の確保と、それを移住・定住につなげる施策の一環でもある。通常の移住・定住者を誘致する事業とは別に、ものづくり人材、それも手薄な女性就業者の養成に特化することで、担い手の確保と併せ、人口減少の抑制にも結びつけようとする姿勢は、いかにも「ものづくりのまち」らしい取り組みといえるだろう。

そして、こうした情報発信の際に市名に必ず冠されるのが「星ふるまち」のキャッチフレーズだ。下松という地名の由来は、推古天皇の頃、鷲頭庄青柳浦の松の木に大星(北辰星ともいわれている)が降り、「星が降った松」が「降り松」に、さらに「下松」となったといわれている。

また一説によれば、百済の琳聖太子が渡来し、以来、百済との交易が開けたことにより、百済と交易する港(津)、すなわち百済津がなまって「くだまつ」となり、「下松」と書き表すようになったともいわれている。これらの言い伝えが継承され、暮らしの中に「星ふるまち」として息づいている。

鉄道車両製造・造船業・鉄鋼業などの重工業からハイテク産業まで、多彩な分野の先端的製造業が立地する下松市の背後には、市内・天王森古墳周辺から令和2年に出

土した「大刀形埴輪」、巫女や盾などをかたどった「形象埴輪群」が象徴する、豊饒な古代史の世界も秘められている。形象埴輪群は「星ふるまち」にまつわる伝説が派生した推古天皇の時代とも重複する、約1500年前のものと推測される。

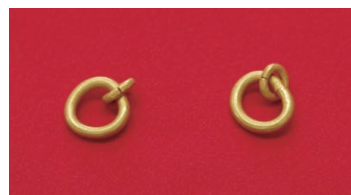
また、天王森古墳では令和7(2025)年末に朝鮮半島製とみられる金の耳飾り2点が県内で初めて発掘されるなど、被葬者がヤマト政権の対外交渉に関わる有力者であった可能性も示されている。

こうした歴史的なバックグラウンドの幅広さや奥深さも、また、現代有数の「住みよさ」を誇る下松市の魅力の源泉の一つといえるだろう。

(取材・文)遠藤隆／取材日 令和8年1月19日



天王森古墳で出土した「靱(ゆぎ)形埴輪」。靱は弓矢の矢を携行するための入れ物だ。大刀形埴輪などと共に、下松市の古墳遺跡の重要性を示している



令和7年の年末、天王森古墳から出土したばかりの貴重な金の耳飾り(金製垂飾(すいしょく)付き耳飾り)